

## 英語リメディアル教育と学力保証

### 高 階 悟

#### I. リメディアル教育の登場

ほとんどの国公立大学では、新入生の学力低下の問題に直面しており、さまざまな形の学生支援の取り組みとしてのリメディアル教育を実施している。英語でリメディアル (remedial) とは、リメディ (remedy : 治療) の形容詞で「治療上の」、「学力改善のための」、「補習の」の意味がある。後者の意味で、教育界に適用されると、リメディアル・クラス (remedial class) は、補習授業になる。リメディアル教育は「ゆとり教育」が導入された1990年代より盛んになってきた。2005年3月にはリメディアル教育についての実践報告や研究発表をする場として「日本リメディアル教育学会」(The Japan Association for Developmental Education) が発足した。2008年、文科省の調査によれば、新入生を対象に高校レベルの補習授業を実施する大学は年々増加し、全体の65%の大学が学力不足対策に取り組んでいる。

秋田県立大学では、1999年に開学し、その後一部の学生の高校での理系科目の未履修や主要科目(数学・物理・化学・生物・英語)の学力低下が問題になった。2001年より基礎学力向上のためのリメディアル教育を開始した。秋田県立大学のリメディアル教育は、主に学力試験を経ずに入学する推薦入試の秋田県内出身の学生を対象にした入学前の学習指導・スクーリングの実施と入学後の主要科目のリメディアル・クラスの「基礎講座」の開講である。

何故リメディアル教育が必要になったのか。次の3つの要因をあげることができる。第一は、18歳人口の減少に対して、大学進学率が増加したためである。1992年の18歳人口は205万人であったのが2008年には約40%減の124万人と言われている。一方、大学進学率は1973年頃には30%でしたが、2009年度には50%に達した。大学進学率が上がれば、一般的に大学入学者の学力低下が生じる。この少子化現象と大学進学率上昇が教育現場に大きな影響を及ぼし続けている。第二に、文科省の指導で国公立大学では多様な選抜制度を導入したことである。学力試験を課さないAO入試、推薦入試、内部進学、また指定校推薦入試など学力不問の選抜が実施されるようになったためである。その結果、選抜方法が多様化するに比例して学力の多様な学生が入学するようになってきた。第三は、大学の市場化である。1960年代の大学教育は、批判的な思考を育てる教養教育が重視され、産学協同の研究活動には批判的であった。が、1991年代の「大学設置基準」、「学位規則」等の一部改正の大綱化以降、大学が生き残りの戦略として大学改革の名のもとに産業界の人材育成のための実用主義に移行したためでもある。世界のグローバル化の中で、大学教育も市場原理主義の影響を受けたためである。その他の学力低下の要因としては、大学の数の増加や高校のカリキュラムの多様化などがある。

#### II. 学力の推移と英語力の実態

秋田県立大学の生物資源科学部の学生の学力推移と英語力の実態を見てみたい。

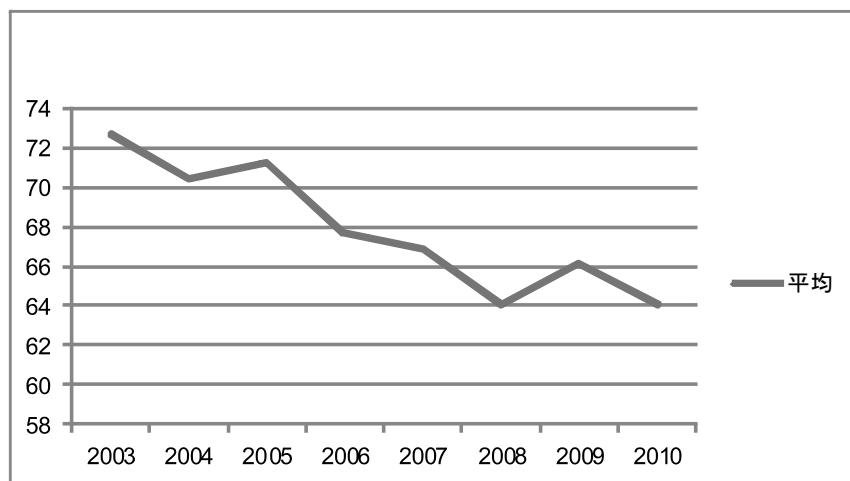


図-1 「英語学力テスト」平均点

このグラフは、新入生が4月に受験した2003年から2010年までの「英語学力テスト」の平均点の推移である。学力の定義はさまざまであるが、ここでは学力テストの結果を学力の指標とする。この「英語学力テスト」問題は、市販のものではなく、新入生の英語力を判断するために専任の英語教員が作成したものである。問題は、中学校と高校1・2年生レベルの語彙・文法問題、民話を題材とした長文読解問題、構文・英作文問題の40問（100点満点）からなるマークシート式の試験である。2003年は全体の平均点が72.7点だったのが、2010年には64点に下がった。このグラフの途中の凸凹は、合理的な説明が可能な部分もあるが、原因を説明ができない所もある。2005年に0.9点伸びた要因は、統計上の標準誤差（standard error）かもしれない。2006年に3.6点下がったのは、この年に新しい学科が開設され、その影響を受けたためである。最低点64点を記録した2008年には、県出身者が最高51.6%入学した。次の年2009年には2.1点伸びた。この原因は、この年からアグリビジネス学科が今まで推薦入試の対象を秋田県内の高校から全国の高校へ拡大した影響ともとれる。この8年間の「英語学力テスト」の平均点の推移（図-1）より、1年に1点ずつ低下してゆく現象が裏付けられた。

では、秋田県立大学の学生は、客観的にどれくらいの英語力があるのか。

2010年に生物資源科学部の新入生（160名）に「あなたの総合的な英語力はどれくらいですか」と尋ねたアンケート結果である。学生の英語力についての自己申告あり、100%の信頼はできないとも言えるが、ある程度の傾向は把握できる。英検2級以上の学生は、全体の約1割であり、「3級程度」

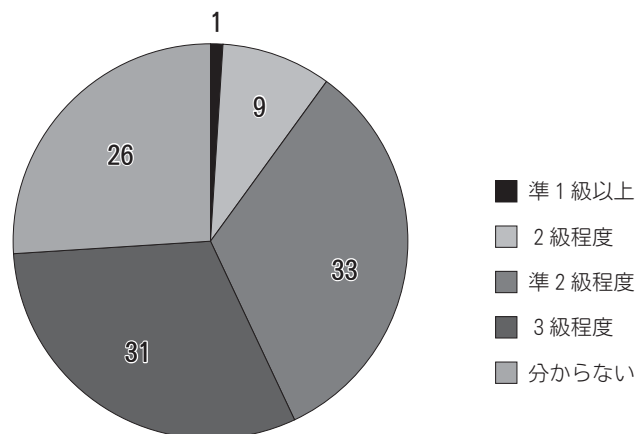


図-2 英語力（英検）2010

と「分からない」が半分以上を占めている。2010年入学者の「基礎講座」の対象者は、化学は全体の74%、生物は27%、英語は27%である。英語の場合「分からない」の学生の割合が、英語リメディアル教育の対象者とほぼ一致する。

そのような状況にありながらも、秋田県立大学生物資源科学部では、英検の試験を全学の学生を対象に年1回実施している。2003年から2010年までの間の2級合格者は平均すると7.2名になる。最も合格者が多かったのは2006年で13名（19名受験）であった。このように毎年2級合格者ができることは、秋田県立大学の英語教育・英語リメディアル教育の成果の一つである。

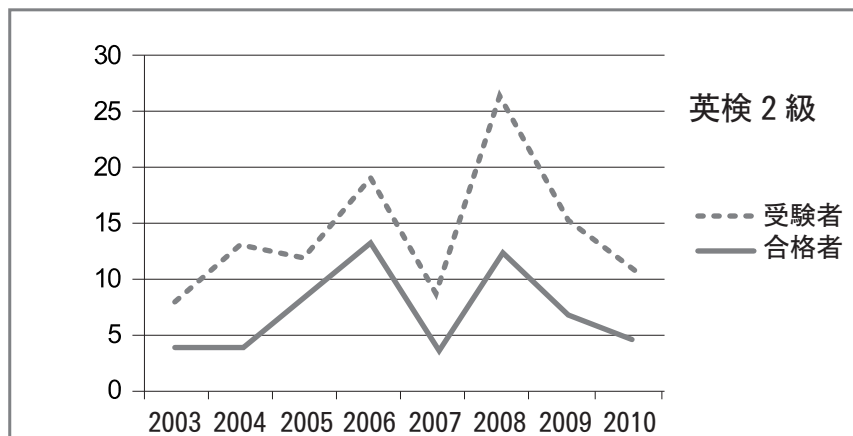


図-3 英検2級合格者

### Ⅲ. 秋田県立大学の英語リメディアル教育

リメディアル教育と言ってもさまざまな形態がある。入学前教育、eラーニング、初年次教育、基礎学力を補う補習授業、高大連携授業、学習カウンセリングなど。現在はそれぞれの大学がさまざまな形態で試行錯誤をしている状態である。秋田県立大学のリメディアル教育（初年次教育）は、第一段階が入学前教育、第二段階が前期の英語学力テストと「基礎英語」、第三段階が夏休み後の後期の「基礎英語」と英語学力テストである。

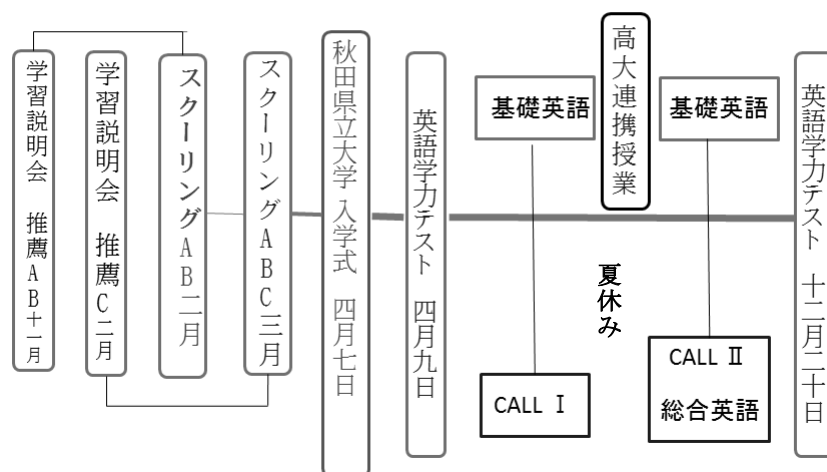


図-4 2010年入学の学生

第一段階の入学前教育は、11月下旬の推薦入試A、B合格の秋田県内の高校生（但し、アグリビジネス学科に県外合格者5名）を対象にした学習説明会から始まる。生物資源科学部の学習説明会では、化学、生物と英語の教員が高校生とその両親を前に入学式までの自宅学習の課題を説明する。英語の場合は、基礎的な文法事項の学習のための問題集『大学生の英語入門』（English Primer, 南雲堂）を紹介し、2月中旬実施のスクーリングまでに学習する範囲、Unit 1 (be 動詞) から Unit 12 (感嘆文)を課題にした。同様に、2月には推薦入試C合格の高校生を対象にした学習説明会を開催し、3月中旬のスクーリングまでの休み中の自宅学習の課題を説明した。

2月のスクーリングでは、最初に家庭での学習成果を確認するための小テストを行い、次に問題集の解答を解説する。スクーリングの担当者は、元高校英語教員の外部講師である。入学前のリメディアル教育は、高校レベルの学力の補完という観点から英語、化学、生物の講師は高校を退職した教員が担当している。2010年の推薦入試A、Bの合格者（45名）のスクーリングの一部を紹介する。スクーリングの最初に行う復習小テストは、日本語を参考にして、英単語を並べ替える問題12問で、このテストの正解率は、73.3%で、満点は6名でした。12問中、最も正解率が高かったのは、正解率93%の一般動詞（過去）からの中学校レベルの以下の問題である。間違った学生が1名いた。

問3. 宿題は終わりましたか。(you, your, homework, finish, did)?

次に、最も正解率の低かったのは、正解率33%の高校レベルの感嘆文の問題でした。

問12. その花はなんて良い香りがするのでしょうか。(the, how, flower, sweet, smells)!

12問の整序問題は、テキストの英文の並べ替えであるが、間違った学生は、基本的な文法事項を理解できていない。高校生レベルの語彙力に欠け、十分にテキストに目を通していないと思われる学生もいた。このような基本的な文法事項が理解できていない傾向は3月の2回目のスクーリングの小テストの結果にも見られた。

第二段階の大学入学後の前期のリメディアル教育は、入学式後の中学校・高等学校レベルの英語学力テストと「基礎英語」である。2010年は、4月9日に新入生を対象に実施した英語学力テストの結果を参考にして、基礎学力を補う「基礎英語」の受講対象者を決定した。受講対象者は、58点以下（平均点64点）の43名（27%）に絞り込み、「基礎英語」2クラスを開講した。担当教員は、入学前教育でスクーリングを担当した元高校英語教員である。授業では、テキストを使わずにプリントで英語の構文と基本的な文法事項の習得を目指している。「基礎英語」は卒業単位には加算されないが、少人数教育の理想的なクラス規模である。さらに毎年、数名の学生が自主的に「基礎英語」に参加を申し出、クラス全体の雰囲気良くしており、出席状況も良い。前期の「基礎英語」の水曜日のクラス（22名、3分の2以上欠席した学生1名を除く）の出席率は、85%以上であり、6名が無欠席であった。「基礎英語」の木曜日のクラス（20名）の出席率は、90%以上であり、13名が無欠席であった。

1年生の前期の必修科目は、1クラス約60名のコミュニケーション重視の「CALL I」である。「CALL I」では、全員に多様なレベル（英検4級から1級）の英語読本、Oxford Bookworms Library, Heinemann Guided Readersなどの多読を課題にしている。学生は英語読本を読んだ感想を書いたブック・レポートを1枚以上提出することになっている。学生が日本語を介せずに、やさしい英語読本を多読する教育効果は、「英語100万語」シリーズ本で証明されている。夏休みには、2008年より秋田県立大学を志望する県内の高校生を本学に招いてコンピュータを使っの英語の授業体験をする高大連携授業を実施している。特に、秋田県立大学の推薦入試Aの受験者の多い、農業系高校を対象に実施している。

第三段階の後期の英語リメディアル教育は、「基礎英語」と2回目の英語学力テストである。後期の「基礎英語」受講対象者は、前期「CALL I」の授業の成績を考慮して英語教員3名の話し合いで決定した。後期は、さらに人数を絞り1クラス16名（10%）の「基礎英語」を開講した。小規模クラ

スにして、丁寧な指導を期待したが、夏休み後の後期「基礎英語」の学生の出席率は、悪かった。実施時間数の3分の2以上の欠席者が5名、11名の出席率は、約80%で、無欠席は1名であった。このように制度としては、英語の苦手な学生が英語力を補完できるようになっているが、学生が教室で学習しない限りは機能しない。「基礎英語」担当の外部講師と専任の教員は常に学生についての情報交換をしており、毎月学生の出席状況についての報告を受けている。必修科目「総合英語Ⅰ」の授業の機会に「基礎英語」への出席を促しても、1～2名がこちらの指導にもかかわらず、出席しない学生がいることも事実である。英語の諺にあるように「馬を水辺に連れていけても、水を飲ませることはできない」という限界をリメディアル教育に感じる時もある。

後期の英語の必修科目は、週2回のコミュニケーション重視の「CALLⅡ」と専門分野のトピックを扱った週1回の「総合英語Ⅰ」である。1年生の後期には、英語の授業が週3コマあり、大学生活4年間の中でもっとも英語の時間数が多いセメスターである。この時期にしっかり学習をした学生は、英語力が伸びるようである。しかし、「基礎講座」を長期欠席した学生は、「CALLⅡ」や「総合英語Ⅰ」の単位を取れない場合がある。但し、一般的に秋田県立大学の学生は、授業への出席率が高く、勤勉に授業に取り組んでいる。2010年の入学者161名中、中途休学者または退学者は、5名であり、比較的少ない。生物資源科学部のここ3年間の退学率は、5.4%である。

初年次の英語リメディアル教育の締めくくりとして、1年間の教育効果測定のために4月に実施した英語学力テストを12月に再び実施した。大部分の学生は、英語力の伸びを示している。

#### IV. 英語学力テストの結果分析

2008年から2010年までの3年間の英語学力テストの結果分析を見てみたい。

2008年	平均点	最高点	最低点	人数	標準偏差
英語学力テスト4月	64.0	90	26	159	15.8
英語学力テスト12月	70.5	92	33	153	12.0

2009年	平均点	最高点	最低点	人数	標準偏差
英語学力テスト4月	66	90	27	161	13.4
英語学力テスト12月	69	94	25	148	13.1

2010年	平均点	最高点	最低点	人数	標準偏差
英語学力テスト4月	64	93	22	161	14.5
英語学力テスト12月	67	95	33	156	13.1

入学後、4月に実施した英語学力テストを1年生の終わりに再び実施する試みは2004年から継続して実施している。1年間、英語リメディアル教育の「基礎英語」の授業を受け、英語の必修3科目(6単位)を履修した結果、毎年同様の英語力の伸びが見られる。2008年(秋田県内出身者が51%)にその傾向が著しく現れている。全体の平均点は2回目のテストで6.5点上がり、最低点も上がり、標準偏差は少なくなり、学力の格差は縮まった。新入生の中で得点の伸びが著しい学生は、「基礎英語」を受けた学生で、この年には30点以上点数が伸びた学生が5名で、最高に伸びた学生は、29点から65点に36点伸びた。2009年は、例外的な年で、「基礎英語」の授業の欠席が多く、学生の最低点がさらに下がり、受験者も13名減った。この年は、秋には新型インフルエンザが流行した時期である。

2010年の英語学力テストの変化を度数分布表で見してみる。

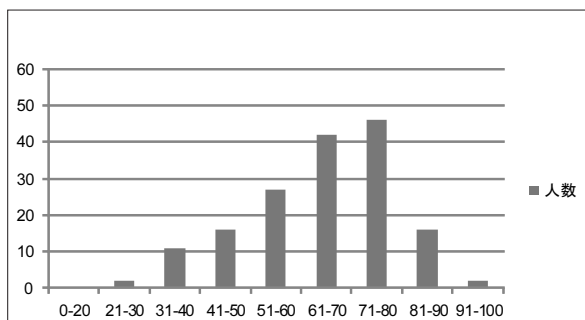


図-5 英語学力テスト4月

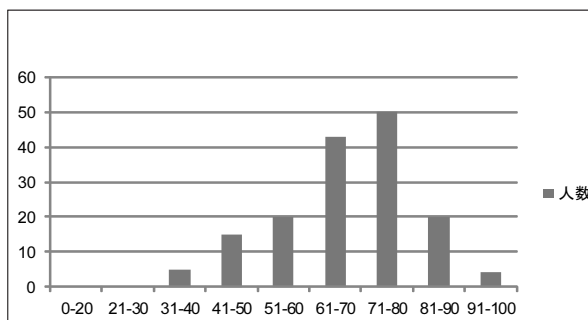


図-6 英語学力テスト12月

放物線状のグラフは、4月（図-5）と12月（図-6）では全体的に右側に移動していることに気づく。4月のテストでは21点から30点の間に2人いたが12月にはゼロになり、4月のテストでは31点から40点の間には11名が12月には半分以下の5名になっている。1年間6単位（3科目）の英語の授業、基礎学力を補う「基礎英語」の授業の成果である。

2010年の英語学力テストの「基礎英語」の授業受講者の推移を見てみたい。

2010年基礎英語	平均点	最高点	最低点	人数	標準偏差
英語学力テスト4月	44.8	58	22	43	8.7
英語学力テスト12月	53.2	73	33	43	10.3

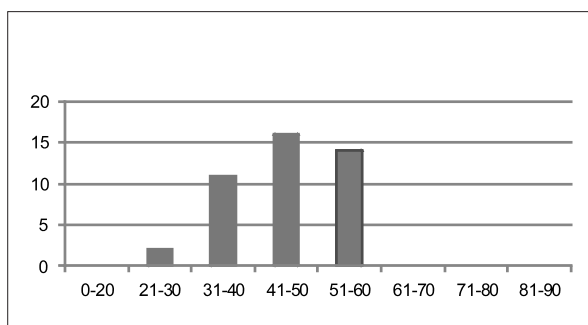


図-7 英語学力テスト4月

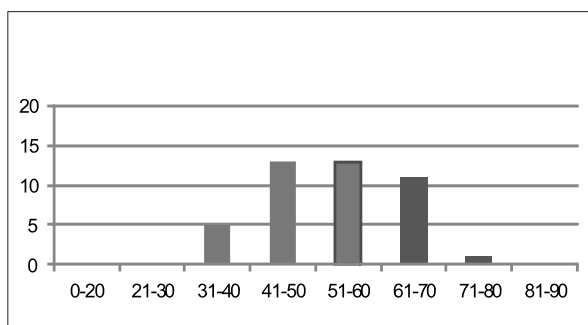


図-8 英語学力テスト12月

4月（図-7）と12月（図-8）の度数分布表を比較してみるとグラフの形の相違は明らかである。4月の英語学力テストの結果、「基礎英語」クラスの対象者は58点以下の学生のため、22点から58点の間に43名分布しており、60点以上の学生はいないため放物線が途中で切れている。12月の英語学力テストの結果、58点の壁を超えた学生は、図-8では捉えにくいだが、16名で、放物線状のグラフになった。「基礎英語」を受講した学生の半数以上は4月の平均点44.8点を超え、平均点は8.4点伸びた。

英語リメディアル教育の前期と後期の小規模クラスの「基礎英語」の受講者の英語力は、他の学生に比べて著しく伸びた。しかしながら、「基礎英語」を受講した学生の基礎学力は向上したが、大学の英語の授業「CALL I」、「CALL II」、「総合英語 I」の単位を修得できない学生はそれぞれの科目に2～3名いた。学生は「基礎英語」の授業を通じて英語力を改善したが、大学レベルの英語力を習得するまでには至らなかった学生が毎年いる。大学のリメディアル教育の目標をどこに置くべきかを考えさせられた。そんな時、大学から難題を投げつけられた。「英語の学力保証」を実現する英語教育体制について検討せよという指示があった。

## V. 英語の学力保証

大学の理事は、生物資源科学部やシステム科学技術部の学部教員の英語教育に対する不満（学生が3年生のゼミの授業で原書の専門書を十分に読めないなど）と一部の学生の授業への不満に対応するために教育担当理事と各学部の教授を中心に「英語教育検討ワーキンググループ」を2009年に組織した。そのワーキンググループで約1年間の議論の末、2010年3月下旬に報告書が提出された。その報告書に「英語の学力保証」を実現する英語教育体制の検討があり、その課題に対する具体的対策を年内に提案するようにとの指示があった。教員は、耳慣れない「学力保証」の用語に当惑した。しかし、2002年より文科省の中教審では「大学の質の保証システム」の審議を始めていた。2008年5月文科省は、日本学術会議に「大学教育の分野別質保証の在り方について」の審議を依頼しており、2010年7月に日本学術会議の報告書が出ていた。このような教育行政の流れから秋田県立大学の「英語の学力保証」の課題がでてきたようである。

「英語の学力保証」という難題に英語教員、教養科目担当教員、両学部の教員からさまざまな意見がでた。そもそも「ほしょう」（保証 or 保障）という漢字の議論になった。最終的に文科省が用いている漢字に落ち着いた。しかし、市場に出ている製品に対するメーカーの品質「保証」の場合は、製品に欠陥があった場合、メーカーは法的に製品に対する賠償責任を負うことを意味している。「英語の学力保証」として大学は何ができるのか。習熟度別クラス編成の実施、TOEIC 試験を実施（工学系の大学では JABEE：Japan Accreditation Board for Engineer Education, 日本技術者教育認定機構との関係で TOEIC を実施する場合が多い）、本学の英語12単位は多すぎる、「吹きこぼれ」対策の実施、「落ちこぼれ」対策の実施、そもそも「学力」とは何か、本学の目標に一致した英語教育の実施などさまざまな意見がでた。まさに蜂の巣をつついたような状態になった

教員中心の英語教育改善研究委員会が2010年に組織され、そこで約1年間今後の英語教育の在り方について議論し、年度末には役員会へ報告書を提出した。報告書は、秋田県立大学の英語教育の目標を明確にし、理系大学のカリキュラムや教員配置などの問題を考慮して「保証すべき最低学力の設定」を検討することであった。英語力の目標を英検2級以上、TOEIC500点以上の習得と明確にした。また、学生の客観的な英語力の測定と教育効果の測定のために年2回の TOEIC Bridge の実施と英語学習を喚起するために海外短期語学研修の実施を提案し、理事会で承認された。「面倒見のいい大学」として秋田県立大学が多様な学生に対応する一つの方策を提示したが、教育機関が人間の能力や言動について明文化して責任を持って学力を「保証」することは難しいことである。これで秋田県立大学の英語教育に関する議論が終わったのではなく、今後も文科省の掲げる品質管理を目指した「大学の質保証」の課題に対応せざるを得ない状況が続くと予想される。

「英語の学力保証」の議論が沸騰し、結論がまとまらない頃、この学力保証の問題について「基礎英語」担当教員に意見を求めた。元高校英語教員の講師は「英語力も大切ですが、困っているのは、一部の学生は日本語が分からないこと」と言った。現実には、新入生の英語力を測定した結果、高校レベルの割合が年々減り、中学生レベルの学生が増えたという大学の報告もある。高校レベルの学力が保証されていない状態で入学した大学生に対して卒業までに学士としての英語力を保証するのは非常に困難である。英語熟達度の低い学生の英語のつまずきの研究から「日本語の漢字と英単語の習得に強い相関関係がある」という報告もある。日本経済団体連合会「新卒採用に関するアンケート調査」（2010年4月14日発表）によると、採用選考時に重視する要素の第1位は「コミュニケーション能力」、日本語でのコミュニケーションをする能力であった。大学生の日本語力の低下も問題になり、最近のリメディアル教育活動の中には、このような企業の要望に応じて日本語の「コミュニケーション能力養成講座」の実践報告もある。リメディアル教育の対象者の中には、学習の仕方が分からず、予習・復習の習慣のない学生、基本的な生活習慣が身につけていない学生もいる。今日のリメディアル教育の課題の一つは、従来の教科型学力のみならず、「読み書き算盤」的な対処型学力を身につけ

る必要があることを痛感する。リメディアル教育の目的は、中学校・高等学校の学習経験への積み重ねによって、自律的に学習することができる「学習能力」(learning literacy)を身につけることである。リメディアル教育を通じて「学習能力」や「コミュニケーション能力」を身につけることは、結果的に就職活動における「就業力」をつけることになる。以上が、教育機関としての大学で教員がリメディアル教育を通じてできることである。18歳人口の減少と大学進学率上昇に直面して今日の大学の役割は多様化しており、リメディアル教育と「学力保証」は新たな課題の一つである。

リメディアル教育や学力保証に関するもう一つの取り組みは、文科省の対応である。現在、高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究から「高大接続試験」(仮称)が2008年秋より検討中されている。欧米の各国では、客観的な学力把握を目的とした共通テストが実施されている。フランスのリセ、ドイツのギムナジウム、アメリカのSAT (Scholastic Aptitude Test) は、高校卒業資格試験を兼ねて大学入学資格試験の役割を果たしている。現在実施されているセンター試験は、利用大学に対して公平な選抜のための資料を提供するという目的を持った集団準拠型 (norm-referenced) の試験である。検討されている「高大接続試験」(仮称)は、高校生の基礎学力把握を目的とした目的準拠型 (criterion-referenced) の達成度テストである。「高大接続試験」は、大学の入学者選抜制度を変え、大学の学力保証の課題の解決の糸口になると思われる。今後の「高大接続試験」の動向を見守っていきたい。

※この論文は山形大学での第37回全国英語教育学会山形研究大会(2011年8月20日)で口頭発表したものに加筆したものである。

## 文献

- 秋田魁新報(2010, 7. 27)「学力不足対策65%の大学着手」  
上垣豊編(2009)『市場化する大学と教養教育の危機』洛北出版  
特集「英語リメディアル教育」(2011, 2月号)『英語教育』大修館書店  
勝野頼彦(2004)『高大連携とは何か』学事出版  
酒井邦秀, 神田みなみ編(2007)『教室で読む英語100万語: 多読授業のすすめ』大修館書店  
佐々木隆生 経過報告書: 「高大接続テスト(仮称)、その必要性・性格・特徴について」(平成22年5月25日)日本リメディアル教育学会第6回全国大会メインシンポジウム(2010, 8. 30)湘南工科大学  
白井恭弘(2009)『外国語学習の科学』岩波新書  
高階悟(2006)「大学生の英語基礎学力向上計画の実践」『秋田県立大学総合科学研究彙報』7号  
竹内洋(2011)『大学の下流化』NTT出版  
東京大学学校教育高度化センター編(2010)『基礎学力を問う』東京大学出版  
鳥飼玖美子(2010)『「英語公用語」は何か問題か』角川書店  
中村朋子(2005)『大学におけるリメディアル教育への提言』大学教育出版  
『ルミナス英和辞典』(2006) 研究社